〈京都支部〉

「介助犬ボランティアセミナー」「第二回京都学生祭典開催」

介助犬ボランティアセミナー
～わたしの手足となる良きパートナー介助犬を覚えてね～

「皆さん、介助犬をご存知ですか？」

介助犬とは手足の不自由な障害者の日常生活を助けるよう訓練された「人のために働く犬」のこと。「人のために働く犬」は他にもいる。代表的なものとして、視覚障害者の目となる盲導犬、聴覚障害者の耳となり日常生活の様々な音を知らせてくれる聴導犬、そして介助犬である。

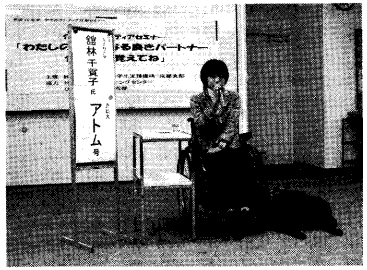
これら身体に障害を負った人のために働く犬を、合わせて身体障害者補助犬と呼び、この補助犬を連れた障害者が様々な場所に自由に出入りできるよう定められた「身体障害者補助犬法」という法律が平成一四年一〇月に施行された。この法律により介助犬をはじめとする補助犬の社会的認知が進むかと思われたが、介助犬と盲導犬とを混同している人がいたり、盲導犬なら知っているが介助犬、聴導犬は聞いたことがないといった人など、その犬の役割をよく理解していない方が今でも多いように見受けられる。今では電車の中や駅の構内に補助犬の啓発ポスター等が掲示され、補助犬の理解を求める普及活動は行われているものの、まだまだ多くの人々に浸透していないのが現状のようだ。

日本学生支援機構京都支部では学生ボランティア活動セミナーを実施するにあたり、この補助犬の中でも介助犬に関するセミナーを企画した。こういった介助犬への理解が広まるには法律はもとより多くの人々の関心が不可欠とされるが、特に若い世代の学生たちが介助犬をはじめとする補助犬を理解し、また、障害者の置かれた現状を把握することで副次的なボランティアの効用が期待できると考えたからだ。

今回のセミナーでは、日本で初めて介助犬を同伴して大学進学を果たした舘林千賀子さん（同志社大学四回生）に講演を依頼することになった。舘林さんは約六年前の自動車事故により、頚椎を損傷し、以後車いす生活を送っている。自由を失った手足に落ち込む毎日を送っていたある日、テレビで介助犬のことを知り、現在、共に暮らす介助犬アトム（ラブラドールレトリバー　オス六歳）の生みの親である日本介助犬トレーニングセンターの本岡修司さんに連絡を取ったのが舘林さんとアトムが出会うきっかけとなった。

ところが、講演を依頼しようにも舘林さんご本人とは直接、連絡が取れないため、京都支部のほど近くにある本岡さんが主宰する介助犬訓練センターを訪ね、本岡さんに面会を申し入れたのが八月の暑い盛りの時だった。本岡さんはとても気さくな方で快くセミナーの講演手配を引き受けて下さった。ところが、本岡さんの口から舘林さんは当時、就職活動の真っ最中で講演には時間を割くことができないかもしれないと聞き、不安を抱えながらのスタートだった。

セミナー開催日は一一月一二日（金）、場所は「市民活動総合センター」「福祉ボランティアセンター」等の複合施設として市民が利用する「ひと・まち交流館　京都」に決まった。当日は平日の開催にも関わらず四〇名近い参加者があり、介助犬の普及促進を訴える舘林さんの活動が既にテレビ、新聞等で伝えられていることもあり、舘林さん及び介助犬アトムへの関心の高さがうかがわれた。



セミナーでは舘林さんの講演に先立って、本岡さんより介助犬についての講演が行われた。現在、日本で活躍している介助犬は約四〇頭。ちなみに盲導犬は約九八〇頭になる。一頭の介助犬が誕生するまでにかかる費用は一年半で約三〇〇万円にものぼる。自治体からの助成金はあるものの、まだまだ十分とは言えない。そのために育成事業者側から本岡さん、介助犬ユーザーの立場から舘林さんがこのような講演会を通じて広く一般の方々に介助犬の果たす役割を知ってもらうことで、より多くの介助犬が生まれる基盤が作られるといった普及活動に積極的に取り組む姿勢が、話し振りからもよく感じ取れた。

本岡さんの講演の中で介助犬のような人のために働く犬の存在の認知が進まない要因の一つとして、日本における犬の文化の貧しさについて言及していたのが印象的だった。人それぞれが犬に対して持つ感情は様々だが、いわゆる家庭犬を含めて、犬に対して抱く感情とする中に、パートナーという意識が非常に低いことも指摘していた。犬にも人権ならず犬権を認める、例えば、第三者が仕事中の犬に勝手に触るといったこと、このこと等が、仕事をする犬を取り巻く社会的背景、環境が非常に遅れている証明だとも強調していた。

続いて舘林千賀子さんの講演では、事故後、手足に障害を負い、将来の夢や希望も失いかけた自分にとって介助犬

アトムがそばに居てくれることにより多くのものを得ることができたかけがえのない存在と話す。思うように動かせない手足の代わりとなってくれることはもちろん、一番の支えとして精神的な安心感を与えてくれる。それは単に犬が人にもたらす「癒し効果」といったことではなく、お互いの信頼から生み出されるものだということが感じられた。

介助犬が、そのユーザーである障害者にとって大きな心の支えであり、他の多くの障害者にとっても良きパートナーとして活躍できる環境を創出できるよう普及活動を通じて多くの人に補助犬の役割をまず知ってもらうことが必要と訴えた。

また、講演終了後は実際に介助犬の普段の仕事振りを実演してもらった。思った以上に介助犬が細かな補助動作を行うことができるということに、驚きと共に訓練の確かさと介助犬の能力の高さを改めて知ることができた。

セミナー全体を通じての感想としては、講演を聞く参加学生の真剣なまなざしには驚かされた。犬が好きだからということだけでは留まらない何かがあるのではないか、特に参加者と同世代の舘林さんが講演者ということもあり、ある意味共感できる部分が多かったのではないかと思う。学生らがこのセミナーで感じ取ったものを様々なかたちで表現し、且つ生かせるような社会を今後、期待したい。

第二回京都学生祭典開催

「学生のまち　京都」の魅力を多くの人に伝えようと、大学の枠を越えて集う「京都学生祭典」が、昨年同様一〇万人規模の来場者が期待される中、昨年に引き続き一〇月九日（土）、平安神宮周辺を舞台に第二回目を迎えた。ところが、当日は台風二二号の影響で、予定していた屋外プログラムの全てが中止となり、京都会館で実施予定のイベントのみの開催となった。本来であれば、平安神宮内の路上では、大学生によるダンスパフォーマンス、路上ライブ等が催され、市民も加わった一大学園祭が再現されるはずであった。この一年、今回の祭典の準備に奔走してきた実行委員の学生たちには厳しい試練となったが、「京都国際学生映画祭inＫＩＦ」と雅楽奏者の東儀秀樹さんらが出演するコンサートは無事に行われた。

また、今回実施できなかったイベントは、京都学生祭典「冬の陣」と称して、後日場所を移して開催されることとなった。

〈松山支部〉

愛媛大学「火曜ナイトサロン」に見る大学と市民の交流

友田　覚

愛媛大学の「火曜ナイトサロン」の始まりは二〇〇三年一月、大学教育総合センターの佐藤浩章講師の呼びかけに共感した二人の学生が、仲間や教職員の賛同者に働きかけて実行委員会を立ち上げたことから始まる。そもそもの立ち上げは、新入生の孤立化を防ごうという目的からであった。メディアの発達や地域・家庭教育の衰退により他者に無関心な学生や社会で求められているコミュニケーションが苦手な学生が増加している。これは近年どこの大学でも抱えている問題であるが、愛媛大学においても、入学直後に友人ができず悩み苦しみ孤独な生活に耐え切れず、遂には退学してしまう……このような学生の増加に悩んでいた。佐藤講師は常々この孤独な学生たちが友人を得る何らかのきっかけ作りの必要性を感じていた。また、同講師は学生たちに「学業以外でも何かを得る」こと、そのためには「友だちづくりが大切である」ことを訴えており、それが冒頭の共感者を生み出した。

友だちづくりは、普通の学生にとって何でもないが、このような新入生にとっては大きな障壁である。先輩と後輩である自分、教員と学生である自分、社会人と学生である自分など常に相対する者との間に「壁」が付きまとう。同等である友人は未だいない、自然と孤独に陥ってしまう。それを突き破りどんなに内気な学生でも一つ二つは発言の機会が訪れ、また、入学以来、「壁」と思っている人と対等に話ができる場ができないか……。入学以来、近寄りがたいと思っている先生や先輩に、何を言っても叱られないし、嫌われない、単位にはならなくとも知的好奇心は満たされる、うまくいけば友達もできる……そのような集まりを創りあげたい。

この企画の運営に当たる実行委員会スタッフに共通したコンセプトは二つある。第一に「学生たちが良質の文化活動やさまざまな人と触れ合うことにより視野を広げ、大学での学びを豊かなものにすること」、第二に

「市民の方々に愛媛大学が持つ文化的資源を活用してもらうこと」である。後者については、ともすれば閉鎖的になりがちな大学を地域に開かれた知的交流の場として公開することにより市民に愛される愛媛大学を目指すことにある。

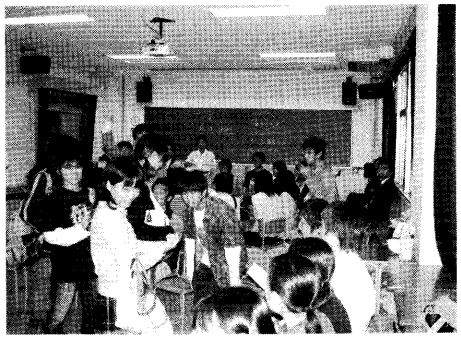
二〇〇三年四月から名前の通り毎週火曜日の夜に開催している。火曜日の夜になった理由は特に無い。

内容は、主に三つに分類され、第一は学生主導によるワークショップ形式のディスカッション、第二は県内の各界の泰斗や教員による講演会やパネルディスカッション、第三は学生や教職員によるミニコンサートや映画鑑賞会などの文化的イベントの実施である。参加者は愛媛大学の学生はもちろんのこと、教職員、一般市民、他大学の学生などである。参加申し込みは不要で、当日会場に行けばよい。面白くなかったら途中退席も自由である。とはいっても実行委員会としては多数の人に参加して貰いたいので、企画にあたっては厳しい議論の上で案を練り上げていく。

イベント部門のひとつである映画鑑賞については、『学生時代に見て欲しい映画一〇本勝負』と称し、発起人の一人であり上映する作品の選考委員である猿渡仁教務課長補佐に話を聞くことができた。氏の話では、上映するフィルムの選考は全委員で五〇本ほどのリストを作って配給会社に在庫の有無を問い合わせるが、マイナーな映画が多いので毎回二～三本しか在庫が無い。最近はアジアの留学生の参加も多いので「アジア映画」の上映が増えてきた。また、猿渡氏は「そもそもナイトサロンはディスカッションの場であり映画はその話題の提供に過ぎない」と謙遜していたが、上映後の感想を述べ合う議論が白熱すると「わが意を得たり」と氏自身も議論の輪に入り込み、時間がオーバーすることも多々ある、とのことであった。

さて、筆者が参加したのは第三三回目で「『坂の上の雲』のまちづくりと大学生へのメッセージ」と題した中村時広松山市長の講演会であった。既に松山市はこの「まちづくり」に着手しており、市内の中心部では関連する工事を始めている。会場の愛媛大学大講堂には、生の市長の講演が聴けるということで約一五〇名の聴衆が集まっていた。

冒頭、市長は『坂の上の雲』のまちづくりについて構想と理念を語った。しかし、その話よりも司馬遼太郎がこの小説を書いた経緯の解説と、市長がこの小説と出会い生涯のバイブルとしている経緯が学生たちの耳目を集めた。市長がこの小説を読んだときは、不登校真っ最中の悩める高校生であったが、それをきっかけに立ち直ることができたこと。その後も繰り返し訪れる苦難（落選、失業）の度に立ち直る力を与えてくれた小説であることを語った。学生からの質疑で市長の不屈の精神力の源について問うものがあったが、「坂の上の雲を見ながら坂を登って行くと、また、新たな坂と雲が現れる。目標に向かってその坂をさらに登り続けていく……若い人たちが夢と希望を持ち続けることの大切さを知る、そんな松山にしたい」と結んだ。



火曜ナイトサロンの講演者は、地域で活躍している泰斗に限定しており、県外から招聘することはほとんど無い。従って講演者は大学関係者やOBによるものが多く、現役の市長による講演は初めてのことであった。悩み多き学生には良き応援歌になったのではないか。

また、繰り返し参加する学生、いわゆるリピーターが増えているとのことである。火曜だけに「通う」ということなのだろうか……発起人の方々、ならびに運営の学生諸君に拍手を送りたい。